

大学を受けるにあたり建築学科へ行こうと考えたのは、高校2年生のころであったと思う。多くの建築志望者がそうであろうが、建築が芸術と工学の雰囲気を合わせもっているところに惹かれたのであった。当時、建築家を主人公にしたテレビドラマがあり、その影響で最終的に建築を目指そうと決めたことを思い出す。佐田啓二という俳優が主演したが、若くて美男子の建築家がローマでプロジェクトを進めるうちにイタリア美人と恋に落ちるというような話であったと記憶する。そのとき「建築家はカッコいい(女性にもてるんだ!)」と思ったことは確かである。

○大学へ

東京大学に入学したのは1968年である。ご承知の方も多いと思うが、この年は多くの大学が混乱の渦中に陥った。入学早々、構内に乱立する革マル・中核・社青同など各セクト、つまり学生運動グループ独特の書体と色使いによるタテカン(学生運動各派の立て看板)やアジビラ(各セクトの主張をガリ版でざら紙に刷ったもの)、大音量のアジ演説の洪水に驚いたが、夏休み近くなるとストライキ(学生による授業ボイコット)や団交(表向きは学生団体と大学執行部との団体交渉)、デモ、校舎の封鎖、果ては内ゲバ(セクト間の対立抗争)などが続いて学内への立ち入りができず、そのうち授業がなくなった。年が明けて機動隊の導

入によって安田講堂の封鎖が解除されるまで、半年ほど大学構内では緊張状態が続いていた。私自身は単なる傍観者に過ぎなかったが、あの出来事を大学「闘争」と呼ぶか大学「紛争」と呼ぶかについては、未だに気持ちの整理がつかず、いったいあれは何だったのかと思う。ただ、あの出来事がその後の自分自身の考え方に一定の影響を与えたのは確かです。既成のことを改めて疑ってかかること、その根底を問うてみることは、あのときの経験から教えられた。

授業がおおよそ半年遅れで再開されたとき、大学の方針は私たちの卒業は遅らせないということであった。当然休みは減らされ、春休みのはずの奈良・京都旅行が夏になるなど、季節をずらせて授業が進行していった。今ならば先生方は大変だったろうなと想いが至るが、当時はやたら詰め込みの授業であることに辟易とされていた。そんな中で専門の授業や設計製図が始まり、(もてたいがために)建築家になりたいという夢は早々に砕けてしまった。自分では「絵が得意なので図面を描けば誰にも負けないだろう」と思っていたが、級友の中にはすでに多くの建築家の名前や作品を知っている者もあり、設計製図の講評では「負けた」と思わせられる作品がいくつもある。何より設計を生業とするためにはまず仕事を獲得せねばならず、業界の内情を薄々知るにつれて、事務所経営

には人脈やら営業センスといった能力が多分に必要であることがわかってきた。そこで早々に設計はあきらめてしまったが、建築の勉強は好きだったのと詰め込み授業の食い足りなさがあった、とりあえずモラトリアムとしての大学院進学を考えるようになった。

○大学院へ

最終学年になり卒業論文をどうするかということになったが、私は内田祥哉先生の研究室に入れてもらうことにした。内田先生は設計もされ、構法計画の研究には論理的な面もあるように思われて、もっぱら芸術性を追求するのは違う建築設計の魅力を感じたのが動機である。研究室では、主に博士課程の先輩から卒業論文の指導を受けることになっていた。私は現在東京理科大におられる真鍋恒博氏に「可動建築論」というテーマで指導を受けた。内容はもうすっかり忘れてしまったが、動かないといわれる建築も時間の流れのなかで見ると「動いている」という真鍋先輩の見方が新鮮であり、かつ得心ができた。この考え方は今でも私の中心にある。

大学院へ進学するに際しては必ず受験が必要で、修士課程は1講座あたり3人までという進学枠があった。内田研究室へは希望者が多く、1年目の受験では残念ながらその3人のうちに入ることはできなかった。そこで親に相談して再度の挑戦を認め

てもらい、大学5年生をやることにした。当然ながら遊ぶための金はなく、今とは違い適当なアルバイトもなかったの、卒業論文の延長のつもりで研究室でうろうろしていると、先輩方からいろいろな仕事の手伝いを頼まれ、それが結構面白かった。また、受験勉強のつもりで学部の講義ノートや教科書を読み返していると、改めて建築知識全般の整理ができた。これらが後年いろいろな場面で役に立ったが、今思うと5年生の1年間はむしろ天から恵まれた時間だったかもしれない。私たちの学年のすぐ下は入試がなかった学年で、教養学部で留年していた強者たちを進学させて専門課程のクラスが形成され、学生の間では「臨時列車」と呼ばれていた。したがって、学生数も少なく、2度目の受験で晴れて修士課程に進むことができた。

○研究生活へ

修士論文の研究テーマを考えているときに、第一次オイルショックが勃発した。トイレトペーパーが買い占められるなど訳のわからない現象もあったが、ちょうどそのころにローマ・クラブの「成長の限界」というレポートが発表され、人類の将来に警鐘が鳴らされ始めていたことが不安を増幅したのかもしれない。また何かの機会に、日本の自動車の世界最高の品質をもつようになる経緯についての話を耳にした。私が子供の頃、日本の自動車はまだまだ質が低かった。街ではテールがピンと立ち上がったアメリカ車が憧れであり、国産車といってもルノーやヒルマンなど外国車のライセンス生産品が幅を利かせていた。そんな時代に「これからは輸出だ」と考えた日本の自動車メーカーがアメリカに車を持ち込んでみたものの、ハイウェイでボンネットが風圧で開いてしまうなど散々な目があったという話がさ

れていた。そのような失敗を重ねながら、それを設計にフィードバックして改良を重ねていった結果が、世界一といわれる品質を達成したということを知り、果たして建築ではどうなんだろうと考えた。個々の設計者や建設会社の中では当然現場での経験を設計にフィードバックすることは行われていると思われるが、建築界全体としてはそうした視点を欠いていると思い、そのことを何か研究テーマに結びつけられないかと考えた。可動建築論から学んだ建築を時間軸で考えることの応用である。

そのような話を内田先生に申し上げたところ、では耐久性をやりなさいということになった。耐久性の研究は、内田先生の前任の松下清夫先生の時代に大きなテーマの一つとして行われていたものであった。それを千葉工業大学の宇野英隆先生が引きついでおられるというので、私は週に一度ほど習志野の研究室へ通うことになった。当時は、旧建設省の総プロ（総合技術開発プロジェクト）という仕組みが動き始めたときで、宇野先生はちょうど耐久性に関する総プロに参画しておられたので、それをお手伝いすることになった。現在の総プロの進め方とは異なり、建築研究所は事務局に近い働きをして、参加している委員が分担して実際の研究を進めるという具合であった。テーマの一つは、当時普及し始めたプレハブ住宅の耐久性であった。当時まだ新しい構法であった鉄骨系のプレハブ住宅は、軽量形鋼という薄い鋼材を主要な構造としているため錆による影響が心配されるということで、その点を調査テーマの一つとすることになった。私が書類をつくって内田先生の名前で応募した文部省の科学試験研究費（当時）が幸いにも採択され、総プロのテーマと重ねて住宅の壁体内の環境条件を調

査して劣化に対する影響を分析することになった。この調査では各社に無理をお願いして調査対象を提供いただき、宇野研究室の人たちとともに大きな計測機器を現地へ運んでデータをとったことが懐かしく思い出される。私はこれらをまとめて博士論文とした。

当時、宇野先生からは統計を勉強しろといわれていた。学部の統計学の授業ではほんの基礎的なことを聞いただけ（それもすっかり忘れていた）だったので、やさしい入門書から勉強を始めることにした。するとその世界の広がり以前考えていたのとはまったく違っているのに驚いた。そのうちだんだん面白くなり、ある程度の内容を理解できるまでにはなったが、統計学は今でも発展拡大していてその全貌はとて知るべくもない。何をテーマにするにしても、私は研究を業とするには自分で何か武器を持っている必要があると思っている。武器とは何か普遍的な手法や方法についての知識や技術であり、例えば外国語に堪能であるとか、物理的な実験がきちんとできるとか、数学的な解析法の知識を身につけているなどである。建築の分野では一つのテーマだけで研究生生活を終えるようなことはほとんどないと思われる。自分の武器さえあれば、研究の目標が変わっても研究者としての存在価値を示すことができる。逆に当面の研究目標にぴったりと沿った方法論だけを身につけると、その目標を維持している間は効率よく研究が進められるであろうが、目標が変わった途端に途方に暮れる危険があるように思う。私の場合は、統計についての知識を勉強したおかげで、耐久性あるいは耐用性の研究から建物寿命の研究へと目標を広げることができたと考えている。

（こまつ ゆきお）